

## ■ 「インクルーシブなまち歩きワークショップ」

(文責) 熊本大学 田中尚人

### 1 はじめに

私たちは、令和5年度・6年度の二ヶ年日本都市計画学会九州支部研究分科会活動「子どもの移動権を支えるまちづくりの実践」研究分科会(代表:田中尚人)として研究・実践を行ってきました。

昨年度は、「子どもが大人からどの程度独立した移動が許容されているか」を表す“Children Independent Mobility (CIM ; 子どもの移動自由性)”に着目して、子どもや子育て中の家族の移動権を支えるまちづくりの実現に関する調査研究を行って参りました。令和6年度は、広くこのCIMについて学会の皆様と議論する場として、九州大学の羽野暁先生をお招きして、基調講演と実際にCIMを念頭にまち歩きを行うワークショップを実施しました。

### 2 インクルーシブなまち歩きワークショップ

日時: 2024年10月9日(水) 15:00-17:30

場所: 福岡女子大学 C204 教室 (講演会)

その後CIMをとともに考える「まち歩き」

#### (1) 基調講演

「インクルーシブインフラと社会モデル

マイノリティを起点としたインクルージョン」

九州大学キャンパスライフ・健康支援センター

特任准教授 羽野 暁 先生

羽野先生は、かつて福岡では、いたるところで見られたごく普通の街路空間の風景写真を見せながら、「子どもたちではなく、社会にある障壁」についてご指摘されました。

現在、当事者研究の分野<sup>1)</sup>では、「障害の個人モデルと社会モデル」という議論がなされている。

①個人モデル(医学モデル):障害は個人の資質によるもの、取り除く努力は自分で行う

②社会モデル:社会や環境のあり方が「障害」を生み出している

いま「障害」の概念が①個人モデルから②社会モデルに移行しつつあり、この考え方は障害者のみならず、マイノリティ全般に通底する考え方である。これを公共・土木が担う社会課題だとするのがインクルーシブインフラの考え方である。

障害の社会モデルには、4つのバリアがあり、a)物理的バリア、b)制度的バリア、c)情報のバリア、d)心理的バリア、があり、例えば車椅子利用者のアクセシビリティだと、階段などの物理的なバリアによりⅠ:排除・除外されていた状況から、Ⅱ:隔離・分離して近づけるスロープなどの施設による「バリアフリー」の実現レベルが長く続いたが、Ⅲ:統合、Ⅳ:包摂を目指す「ユニバーサルデザイン」の段階に近づき、マジョリティの「枠」にマイノリティを受け入れようとしてきた包摂から、近く、その「枠」さえもない、そのままを包摂するⅤ:包摂STEP2を実現するのが、インクルーシブインフラである。



写真-1 羽野先生による講演の風景

九州大学らくちんラボでは、障害を持つ当事者、学内・学外の実務者、多領域の研究者の三者が協働し、研究・実践しているそうで、羽野先生は、学内や学外でも一部施工され、今後どんどん導入される予定という「車椅子利用者と視覚障害者の双方に配慮した歩車道境界ブロック」を説明して下さいました。歩車道境界をできるだけなくして欲しい車椅子利用者と、歩車道境界をしっかりと区別して欲しい視覚障害者、双方のコンフリクトを解消するイノベーションを、まさに三者による協働により課題解決していくプロセスを丁寧に教えて下さいました。さらに、バックしなくても駐車ができる障害者用駐車場の提案、しっかりと音がする舗装、色の多様性に配慮したサインなどの事例も見せて下さいました。

さらに羽野先生の実践として、鹿児島島の山田橋に関わる「生活景の継承」の事例について話して下さいました。解体されることになった小規模な歴史的橋梁について、現地保存はできずとも新橋が見える橋詰公園の整備を行い、紙芝居などを用いた記録保存を試み、その過程で発達障害を持つ子どもがプロジェクトに参加して、ともに風景づくりに携わってくれた事例について、教えて下さいました。2019年に完成した「やまだばし思い出テラス」は、土木学会デザイン奨励賞、キッズデザイン協議会会長賞を受賞している。

これから。誰もがウェルビーイングの高い生活を送れるようなインクルーシブな社会構築のために、より多様なひとの多様な生活を可能にするインフラ、

より多様な人と一緒に創造する、共創するインフラが求められるようになる。これまでのように、健康な成人男性を標準としたデザインではなく、ニーズやイノベーションのヒントが多い、多様な人々とともにつくるインクルーシブインフラの重要性を羽野先生に教えて頂きました。

## (2) CIM をともに考えるまち歩き

羽野先生を含め、12名の一般参加の方々とともに考えるまち歩き実施しました。福岡女子大学が立地する香椎地区には、2021年末をもって閉館した西鉄香椎花園があり、下校時の子ども達を含んで、地域住民のみなさんもよく歩く姿を見かける、坂の多いまちでした。香椎花園線を海の方に降りて行き、フルフル風の森を抜け、福岡アイランドシティへと渡る「あいたか橋」を渡ると、戸建住宅と高層集合住宅が広がる風景となりました。最後はアイランドシティ中央公園にて、振り返りの会をしました。羽野先生の講演を聞いた後ただだけに、それまで当たり前と思っていた風景の中に、多様な登場人物を想像する、面白いまち歩きとなりました。ご参加頂いた皆さん、ありがとうございました。

### 【参考文献】

- 1) 宮崎耕輔, 松尾幸二郎, 吉城秀治, 葛西誠 : 6 License に着目した日本の CIM の実態、機関誌交通工学, 59(4), 46-49, 2024.10.
- 2) 熊谷晋一郎, 当事者研究 等身大の<わたし>の発見と回復、岩波書店、2020.7.



写真-2 香椎花園の住宅街



写真-3 あいたか橋



写真-4 香椎照葉地区



写真-5 中央公園